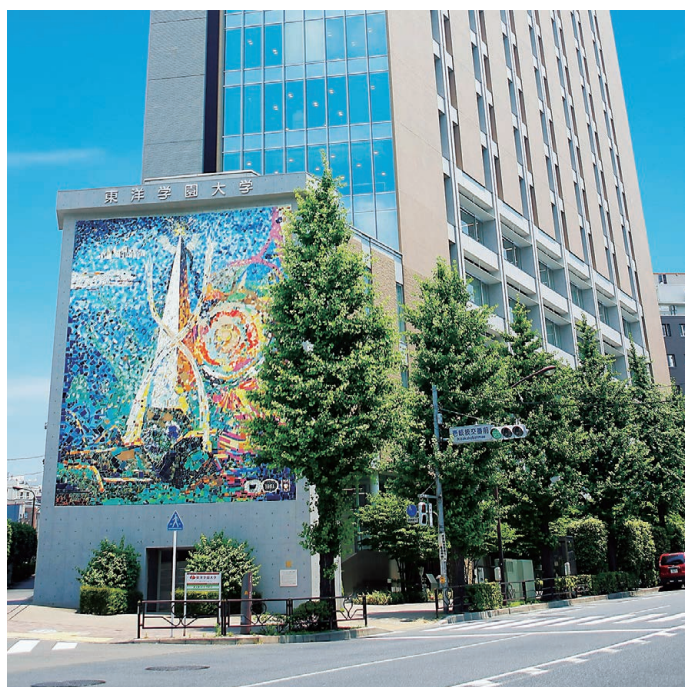


研究室だより

56



東洋学園大学



授業の一貫として開催されたこども服の譲渡会



フェニックス祭でダンスを披露する Extreme ☆ Steppers

一 目 次

1. 本学着任からの5年を振り返って 赤 尾 充 哉…… 2
2. 国際交流人材の作り方 対 馬 宏…… 8
～グローバル・コミュニケーション学部への惜別を込めて～
3. 「大学教授」の日常 依 田 悠 介……12

※3は冊子でのみ公開しています。
PDFではご覧いただけませんので、ご了承ください。

本学着任からの5年を振り返って

赤 尾 充 哉

1. はじめに

本学に私が着任したのは2020年4月のこと。現在5年目の秋を過ごしている。とはいっても、なかなか涼しくならない秋だ。いや秋とはこういうものだったか。はて思い返そうとしてもなかなか思い出せない。

ところでいま息子の七五三をしなければならぬ時期で、その関係で娘の七五三の写真を振り返ってみる。二度の七五三のうち、7年前のものは覚えているが、はて3年前のものは記憶がない。写真にははっきりと私の顔も写っているのだが、かろうじて娘の晴れ着姿に見覚えはあるものの、そこに自分がいた記憶は無い。

どうやらここ数年は、私にとってはなかなか大変な時期だったようだ。その自覚さえ無いのだけれども、かといって、着任後何もしていなかったというのではあまりに空しい。そういうわけで、着任後の5年間を振り返ってみようと思った次第だ。したがって、このエッセイは極めて私的な内容になるが、ご容赦願いたい。

2. 着任と同時にコロナ禍

2020年4月と先ほど述べたが、この日付は多くの人々の記憶に残る日付だろう。特に教育産業に従事する人間に

としては、大きな苦難の始まりだったことだろう。いわゆるコロナ禍の影響で、教育機関は休講を余儀なくされた。本学は早期にオンライン講義に移行するべく、教職員によって急ピッチで準備が進められた。

その真っ只中に着任してしまった私は、教職員ともロクに会ったこともなく、ましてや本学の学生には一人も会ったこともなく、ただ黙々とオンライン講義の準備と実施に追われた。

私にとっての困難の一つは、横並び授業への対応だった。本学の教育の特色の一つに、必修の基礎教育や入門の科目の多さがある。そうした科目の場合、複数の教員が分担してクラスを受け持つが、その内容は調整して足並みを揃えなければならない。そういう科目を一度に4科目受け持つことになった。これは参った。調整の多さもさることながら、科目ごとに運用ルールが異なる。ところがこちらは科目名の違いさえいまひとつ分からない状況であり、何が何やらの全くの大混乱である。しかも、それらを全てオンライン上のコミュニケーションで解決していかなければならない。

もう一つの困難は、オンライン講義が動画配信という形で行われたことだ。動画制作のスキルはもともと持ち

合わせていたのだが、それで調子に乗ってしまったのが良くなかった。うっかり、しっかりと作りこんでしまったのだ。最初にそれをやってしまうと、もう引っ込みがつかない。ずっとその水準でやり続けるしかない。本学の授業に加えて、もともと持っていた非常勤先の講義、さらに前任校で受け持っていた講義も非常勤として引き続き担当することになっており、それら全ての講義動画を作らなければならなくなった。しかも、すべて異なる授業内容なのである！

こうして恐ろしいほどの時間を動画制作に費やすことになった。具体的な数字を言うといろいろと問題になりそうなので差し控えるが、とにかくにも生活のほとんどを動画制作に奪われることになった。それが毎日続く。もはや人間の生活ではない。もちろん健康状態はどんどん悪化していく。このままではCOVID-19にかからなくても、間違いなく死ぬ。

さらにもう一つ困ったのは、家の環境であった。当時古いアパートに住んでいたため、回線がどうにもならないほど脆弱だった。加えて、生まれたばかりの子供を含む一家四人が、行き場も無く家で過ごしている。その中で寝る間も無く動画を作り続けるのである。そこで着任後最初の大仕事は、自宅の転居となった。そんな予定はなかったのだが。前任校の退職金が、思いもよらない理由で減っていく。

ある日、時間を見つけて、自転車に乗って大学まで来てみた。大学の前で写真を撮って帰った。まだぼくは自分

の研究室で仕事をしたことが無かった。

本学での1年目は、ただただそうした苦難の日々でしかなかった。心機一転、清々しく新しい環境で頑張ろう、と思って着任したが、まったくもってさんざんだった。と、ここまで愚痴につぐ愚痴を吐き出してしまったが、もちろんこれは私一人だけが置かれた状況だったわけではない。本学のみならず、日本中の教職員が疲弊し、日本中の学生が多くの機会を奪われたのだった。

3. 大学教員が大学生になる

2年目を迎えるときこのままではよくないと、前任校のゼミを除いて、全ての非常勤を断った。すると、今度は金銭難が私を襲うことになったわけだが、それでも断る理由があった。かねてより、本学に着任したら、2つの個人的な目標を達成したいと思っていたからである。

1つは、大学生としてもう一度学ぶということだ。分野は何でも良かったが、いわゆる理系の勉強がしたかった。少年時代の私は、多くの学生同様、単に数学が苦手だからという理由で、自分は文系だと思い込んでいた。高校生の頃には、ほとんど理系科目を勉強することも無くなった。ところが、研究者として学問に取り組むようになると、文系・理系の別などはほとんど意味が無く、多くの学問分野がつながっていることに気づいた。経営学を研究するために本を開けば物理学の話が出てきたりする。そういうことが、だん

だんと面白くなってきた。だが、理系に関しては中学生レベルの知識しか持ち合わせていないのであり、面白いといっても素人の感想でしかない。もっとちゃんと分かれば、もっとちゃんと面白いはずなのに！ もちろん、私はすでに大学を卒業しているので、大学院に入るという手段もある。だが、中学生レベルの知識しか持たずに大学院に入っても、その先は目に見えている。やはりしっかりと勉強しなければならない。そう思って、学部からやり直すことにした。

学部からやり直すことにはもう一つの意味があった。おおよそ研究者として過ごしていると、自分の専門領域についてはそれなりによく知っている。それが自尊心につながるなら良かったのだが、私の精神性はどうかそうはならないようだ。知っていることが多くだけ、新たな学びに出会う機会は減っていく。それはあたかも自分にはもう未来が無いかのようと思われる。それにひきかえ大学生というものはどうだ。多くの学びと多くの成長の機会に囲まれていて、未来は無限の可能性に開かれている。羨ましい！ 私も大学生になりたい！

しかも、私は自分の専門領域について「それなりに」知ってはいるものの、さりとてものすごく知っているわけでもない。優秀な研究者たちを前にすると、あまりにも彼らと私の間の差が大きいことを知る。普通ならば、よし私も頑張ろう、彼らを目指そう、と努力するものなのかもしれないが、私は到底かなわないとあきらめてしまった。

この道を突き詰めていっても、彼らには追いつけないのである。であれば、私はまっすぐに突き進むのではなく、横に広がっていこう。そう思ったのだ。幅広い知識を追い求める、それは専門的な研究者の目指すべき姿ではないかもしれないが、一個人の人生の在り方としては無意味ではないはずだ。

あらかじめ、入学する大学は目星をつけていた。仕事をしながら大学生になるわけだから、夜間か通信制しか選びようがない。そして、これは知らなかったことなのだが、ほとんどの夜間学部や通信制は文系学部でしか開講されていないのである。ごく一部の大学だけが理系学部を開講しており、しかも、実験等を伴わない情報系の分野に限られている。そういったわけで、きわめて限られた選択肢の中から、帝京大学理工学部情報科学科を選び、二年次編入学することとなった。

初めは意気揚々だった。知らないことを学ぶ。新しい分野に飛び込む。それはとてもワクワクすることだった。しかも、私は心のどこかで、自分は頭が良い、とか、自分は勉強ができる、とか、そういう根拠の無い思い込みがあった。なぜかは分からないが、そう思い込んでいる時期だった。

だがあっけなくその意気は打ち碎かれた。なにしろ難しい。主観的にいえば、想像をはるかに越えて難しい。この科目は高校の復習レベルです簡単ですとシラバスに書いてあっても、さっぱりわからない。思い返してみれば、最初に大学生を送ったときだって成績が良かったわけでもないし、大学院で

は落ちこぼれていたし、大学に入る前までさかのぼってみても、勉強への意欲がわからないままだったらと2年間も浪人していたのである。いったいどこから、自分は勉強ができるという思いが出てきたのだろう。加えて、老化と体調不良の影響で、頭は若いときよりもさらに動かない。

さらに、通信制のシステムは、毎回かなりの量の課題を課してくるし、しかもそれを15回分全て提出し、なおかつ合格しないと、期末試験を受ける権利を得られない。意気揚々と履修登録した科目のほとんどにおいて、期末試験までたどり着けない。なんとか期末試験にたどり着いてもそれだけ課題をやったのだから許してくれるかと思いきや、科目によっては期末試験がさらに難しかったりもする。全くついていけない。動かない頭。足りない時間。迫りくる期限。ついに私は、教科書を前にして、頭を掻きむしって「うーーー!!!あーーーー!!!」と叫び声をあげるに至った。だが、叫んでみても、何一つ分からないのである。なぜこんなことをやり始めてしまったのだろう。

この取り組みは、私の個人的な人生観か、あるいは単なる趣味という動機で始めたものだが、職務上の利点もあった。通信制ほどの厳しさは無いにしても、現在の大学生に求められる学習量は、かつてのそれよりもはるかに多い。もちろんそれを課すわれわれ教員は、それぐらい当然できるだろうし、やるべきだと思って課しているわけだ。だがそれは、自身の専門分野とし

て研鑽してきたから言えることであって、これから学び始める学生にとっては全般的な外れなことである。学生からすれば、分からないものは分からない、できないものはできないのである。自分自身が学生になることによって、そういう目線を得ることができた。

かといって、大学の学問を簡単にすべきだとは思わない。一方で、完璧に分らなければならぬとは思わないのである。難しいことにチャレンジして、それなりに分かって、それなりに分らなくて、それなりに努力して、それなりに受け流す。そうやってそれなりの知識と教養を身につけて、未来に羽ばたいていくことが学生にとっては重要なのだ。繰り返すが、ここでいう「それなりに」はあまりに簡単であるべきではない。

さて、私のほうもとことん理解しようという気張った姿勢を捨て、それなりに理解していこうという姿勢で勉強を続け、分からないながらに少しずつ単位を取ることができた。2年次編入なので、正規では3年間で卒業ということだが、こんな調子なので当然3年で卒業とはならず、現在4年目を迎えている。1年余計に在籍しているが、それでも困ったことに、私なりに頑張ったとしても、卒業にギリギリ届くか届かないかという状況である。もう1年ゆっくりやれば、確実に卒業できると思う。だが私にもなけなしの意地があるようで、今年度で卒業を決めてしまいたいという思いもある。これから最後の勝負に向かう。

4. 博士号という忘れ物

私にはもう一つ重大な宿題があった。博士号の取得である。普通、大学教員というものは、大学院を出て博士号を取り、それがあつた種の免許のような役割を果たして、大学教員としての職につくことが多い。私はなにしろ不良大学院生だったので、大学院の在籍期限を過ぎててもなお博士号をとることはできなかった。できなかったというより、着手することさえできないくらいのものであつた。それほど私の研究と研究能力は遅れを見せていた。

そうなると、たいていは大学教員への道を絶たれてしまうものだが、私の場合は運よく博士号無しでも大学教員となることができた。一度大学教員になつてしまえば、他の大学に再就職しようという場合をのぞけば、博士号を持つていても持っていないくてももはや大して意味が無い。

私もこのまま座つていれば、それなりの安定した待遇を長期にわたつて得ることができる。そのことだけ思えば、人生万々歳だ。いやむしろ「してやったり」ともいえる。落ちこぼれが大した努力もせずに、これだけの境遇を勝ち得たのだ。私が楽観的な人間なら、ギャンブル大成功だと大喜びして生涯を過ごすのだろう。

ところが、私はうじうじとした悲観的な人間である。大半の人が博士号を持つている業界にあつて、私はそれを持っていない。博士号は大学教員としてのキャリアのスタートとなるものであつて、そうすると私はスタートさえしていない。さきほど私は、専門分野

では人に追いつけないので、幅広い知識を追求したいと述べた。しかし、この状況でそれをやつたとしても、専門分野から中途半端に逃げ出したような感じにしかならないし、そう思うから中途半端に専門分野への未練も残している。とにかく気分が悪い。

そこでついに、十数年のときを経て再び博士号と向き合うことにした。博士号を取るためには、博士論文を書いていずれかの大学に提出し、博士に相応しいと認めてもらわなければならない。

そしていつものことだが、意気揚々と書き始めたのは最初の1か月にも満たず、すぐに事の困難さに気づいてしまった。論文という形で言葉にしようとする、自分の研究の足りないところが、たくさん見えてきてしまう。それはうんざりするほどたくさんあつた。それでもここは勝負所だと思つて、少しずつでも書き進めた。途中何度か病気をし、そのたびに研究は止まつた。病気の間は研究ができないことが精神的な負担となつた。病気が治つて再び筆を持つたときに、筆が全く進まない自分に再びショックを受けた。私はついに、頭を掻きむしつて「うーーーー!!!あーーーー!!!」と叫び声をあげるに至つた。

そうやつて苦しみながらも、多くの大学教員はこの苦しみをすでに乗り越えたのだということを思い、自分だけがあきらめるわけにはいかないと思ひ直した。また、書いているときには時折、とても思い通りに進むことがあり、自分が素晴らしい論考を述べているよ

うな錯覚に陥ることもあった。そういうときは夢中で書いた。

そうこうしてついに書き終えることができた。まだ正式に申請はしていないが、かつての指導教授などに読んでもらっているところである。そうなる、と、書いている最中とはまた違った精神的な圧力を感じるようになる。書いている最中には、時々素晴らしいことを書いているような気になって書いていたわけだし、素晴らしい論文を書こうと思って苦労していたはずである。ところが書き終わった瞬間に、それらが全てちっぽけなものに思えてくる。素晴らしいことなんて何一つ書けなかった。バカバカしいことしか書けなかった。苦しんで努力をしたつもりだったが、そんなものは努力のうちにも入らない程度のものだった。そう思えてくるのである。そして、「こんなものは博士論文のレベルには当たらない。どう頑張っても無理だ」という連絡が指導教授から来るのを、毎日いまかいまかと待ち構えている。書き終わったらすっきりするかと思っていた

が、書き終わったらなおさら、想像以上の恐怖と後悔の日々である。

そこで気づいたのは、すでに博士号を持っている先生たちは、この苦しみをすでに経験し乗り越えてきたのだということだ。このことは私にとっては想像以上の驚嘆と尊敬となった。

5. おわりに

さて、とりとめもない話をしてしまったが、ここらへんで締めくくらないといけない。見ようによっては、場に相応しくない、非常に悲観的な文章を書いてしまったかもしれない。一方で、これらの経験が私に与えてくれた気づきは少なくない。思うようにスラスラと事が事が進んだわけではなく、ストレスと疲労ばかりが積み重なった取り組みではあったし、この努力によって私のキャリアがどうにかなるわけでもないのだが、それでも成長したことには変わりはないと思う。と、自分を慰めたい。

(現代経営学部)

国際交流人材の作り方

～グローバル・コミュニケーション学部への惜別を込めて～

対 馬 宏

30 年以上お世話になった本学から 2024 年度を以て退官することになった。その機会を捉えて、一言言葉を残すこととしたい。

内なるグローバル化、日本に在留する外国人との交流という国際体験

国際体験の手法として教室を飛び出す、特に海外で授業以外のことを行うことが前提となっている向きもある。しかしそれだけが国際体験の方法であろうか。

私は 1 年前に研究室だよりの 55 号で「グローバル・コミュニケーション学部の長期展望という一考察」と題する文章を書いた。そこで示したことは、要するに内なるグローバル化への対応を推奨するということである。

決して海外体験がよくないなどと言いたいわけではない。それは相当な労力をかけてなされるのであるし学生たちにとっても大きな財産となる。しかし、今後のことを考えるとそれはコストがいいと言えるだろうか。

まずコストであるが 1 年がかりの長期であれば、現在、300 万円はかかってくる。このお金が出せないといってすべて準備を整えながら断念する例はよく聞かすが、少なくとも私たちがそうした決断を否定的に捉えることは出来な

いであろう。夏期休暇などを利用しての短期でも数十万円はかかる。時間コスト、労力を考えると一步間違えば、勉学という学生本分の本末転倒になりかねない。

筆者は都内某所の見学に行く場合にその往復の交通費 340 円について聞かれたことがある。グローバル・コミュニケーション学部学生にしてその程度 of 感覚であり、そしてまたその感覚を私は決して軽く見られない。教室で教員の授業を聞き、貴重な動画を見て、同様のことに関心を抱く学生と意見交換をする時間よりもそちらの方が学びにとって重要とは必ずしも言えないであろう。

グローバル化、グローバル交流の相手方とは

グローバル交流と言えは人との交流である。人的交流と言えは、まず先に思い浮かぶのが、観光分野ではないだろうか。より正確にはビジネスもあるので訪日渡航者であるが、この人たちと交流というのは難しい。現在非常に多くの人が日本に学びに来る。長期的に日本に来て、住所を構え日本のことを知ろうとしている人たち、大半は日本で働こうとしている人たち、あるいは留学生であるが、そういう人たちと

の交流の場を作ることが非常に重要になってくる。

このことを今まで再三指摘してきたわけであるが実際に交流の機会が来たのでここで紹介したい。

在住日本語学校との交流

相手方は東京工学院日本語学校である。世界各地から留学生を集めている。日本語学校と言えば、中国など一国に拠点を設けて留学生を送り込んでくるケースもあるが、東京工学院はそのような手法をとっていない。10数カ国に及ぶ世界様々な地域から留学生を集めている。

なぜ此処と縁が出来たかという答えは簡単で、実は本学の卒業生である藤田梨子さんがこの日本語学校に日本語教員として就職し、教壇に立っているのである。本学専任の日本語教員指導の要、山本先生の下で日本語教員の資格を取得し、2年前の2023年より教えている。その学生が私のゼミの卒業生と言うこともあり、交流が始まった。

きっかけは先方の校長である関口純先生からの依頼であった。関口先生は海外で日本語教員としての経験も長く、外国語、特に日本語学習者のニーズをよく把握されている。日本語を学習するために外国人留学生が来るわけだが、その留学生たちがごく普通の一般の日本人、しかも同世代と交流する場が少ないという事情がある。日本人と言えば日本語学校の教職員か、でなければ、アルバイト先の日本人かというところである。このことが彼ら留学生たちの悩みのタネになっていた。も

しろんこのような状況は何も東京工学院だけに限ったことではない。関口先生はそここのところをくみ取り、本学と学生同士の交流が出来ないかを打診してきたと言うことである。

グローバル・コミュニケーション学部の学生は、人的交流を通じて外国人と交流することに関心が高い。このため、そのような人材とのマッチングは相互に Win-Win の関係となる。

この交流の特徴は？ まずご招待から

そしてこの交流の最も特徴的なところは簡素、手軽と言うことである。まず双方が交流しようという意志を持っている。だから私たちはそのセッティングだけをやればいいと言うことである。お互いに話をしたがっているわけだから、放っておいてもいいくらいだが、せいぜい、お題を用意させてもらう。国ごとの習慣の違いや現代的な価値観の違いを際立たせるものなどがいい。

今回の交流で用意したものは、何か聞きたいことを事前にまとめておき、それを先方に伝えただけ、なぜ日本に来たのか、日本のどこがいいと思ったのか、自分の国とどこが違うのか、などであった。

次にいいところは、日本語が標準語だと言うことである。英語を使わなければならないなどのことはない。その点の用意も最低限で済む。

場所の選定も大きい。今回大学側で準備したのは教室だけである。管財の方にレイアウトの変更をお願いしたがそれ以外は何もしていない。画面に大

写しに歓迎東京工学院日本語学校の文字を配し、広報の方に撮影を頼んだだけである。

こちらが場所を動かさない、というか、この、本郷という立地が魅力になっていること自体を活用しない手はない。まさに、グローバル東京なのだろう。

10名対10名になったので話がしばらくと考え、4つのグループに分けてフリーカンパシーションの形を取ってみた。どのグループも活発に意見を交わしていた。

次には日本語学校へ本校学生が訪問

そして、3ヶ月後には、答礼として本学のゼミ生が先方の日本語学校を訪ねた。この時は関口先生がまず日本語学校全体の概要、その作られた経緯、役割などを説明してくれた。この後に40から50分ほどの交流、ディスカッションを行った。今回は、「休みの日の過ごし方」「結婚」という題で2つのグループに分かれ、情報・意見交換した後、各グループごとの発表にまでこぎ着けた。今回の場合で言えば、結婚式の各国での習慣がそれぞれの国の出身者から披露され、タイでは、朝、夜、夜のその後？と3回結婚式を行うとかモンゴルでは2日かけて披露するとか聞いているだけでも関心をそそるものであった。こうしたいわば異文化理解の端緒が20歳代、その前後の彼らにとって非常に貴重な経験となることは間違いない。

日本語学校の留学生と言えば、途上国からの人々が日本で稼ぐための隠れ

蓑のように言われた時期もあった。留学生ビザがあれば日本国内では基本的に就労不可の外国人が週28時間、長期休暇の際は最大1ヶ月200時間のアルバイトが認められ、来日するために留学斡旋業者からの多額の借金を背負い……などとネガティブな報道もよく見られる。もちろん、様々な悩みや苦労もあるだろうが、日本に憧れ日本を留学先に選んだ人たちと交流することが双方の刺激になることは間違いない。それは日本人が留学するときのことを考えれば容易に想像がつくはずである。

これから必要な国際交流人材とは

問題は国際交流のどういう人材が必要かどうかである。

これについては既に研究室だよりの55号で指摘したとおりである。観光客が中心の渡航者はアウトバウンドではこの20年間、年間2000万人ほどでほとんど増えていない。ビザ緩和措置、LCCの急激な発達があったにもかかわらずである。一方でインバウンドは急増したのはグローバル化とはあまり関係なく東日本大震災以降数倍となり、現在は3700万人に迫る勢いである。当然、インバウンドにかかわる人材が必要になってくる。

が、ここで強調したいのは、むしろ、着実に急増している外国人労働者、そして、その家族、留学生を含めた在住外国人数である。2000年当時、すなわちグローバル化が叫ばれ始めた頃にはわずかに50万人程度だったのが今は300万人を超えている。そしてその大方は

首都圏、東京に集まっているのである。

このままで行くと、2050年、20数年後には、日本の労働人口の10%になるという予測もある。今の日本の若い人たちは好むと好まざるとに関わらずこの人たちと生活を共にしなくてはならないのである。日本の文化を中心に据え、日本語を使ってである。

こういう人材を育成することが急務になっていく。というかもうなっているのである。国際化とかグローバル化というのは、別に海外に繰り出して獲得していくスキルではなくなっていく。私たち一般の人たちの生活の一部になっていくのである。そうしたときに、どういうコミュニケーションを国内で取っていくのか、どう共存共生していくのか、それを学ぶスキル、グローバル化のスキルが備わっていないといけないことになる。

以前より国際畑などと言われるが、

海外事情を日本に伝える外国帰りの人材とは別に、国内での交流をスムーズに行っていく、そういう人材の育成が急務なのである。しかもこの首都圏の中心、文京区、本郷でこそなのである。

30余年の在校経験を振り返り、グローバル・コミュニケーション学部の行く末を考えたときに、この点に思いを致さない手はないと私は強く思う。もう一度繰り返すとすれば、内なるグローバル化、これに対する人材を育成する国際体験を是非とも推奨したい。海外へ行くという学外研修はもちろんであるが、コストパフォーマンスの面でも是非、国内にいる、来てくれる、そして日本に強い関心を持っている外国人との交流を推進するときに来ていると考える。

(グローバル・コミュニケーション学部)

『研究室だより』編集委員会

委員長	赤尾 充哉	
委員	足田 和人	
	対馬 宏	飯田明日美
	李 新建	松本 純一

表紙写真 正面玄関フェニックスモザイク

■『研究室だより』 No.56

■発行・2025年3月1日

■編集兼発行人・愛知 太郎

■発行所・東京都文京区本郷1-26-3

学校法人 東洋学園 TEL 03(3811)1696

■印刷所・山浦印刷(株) TEL 03(3203)4721